

# 神学校問題への提言

諸集会の間に「聖書に反する方法」が広まることへの警告

マイケル・ブラウン著

# Bible Colleges?

(A Warning Against the Spread  
of Bible Teaching Institutes  
Among NT Local Assemblies))

By  
Michael Browne

GOSPEL TRACT PUBLICATIONS  
Glasgow, Scotland

Publisher  
Evangelical Publishers  
Tokyo, Japan

# 目次

聖書学校？	5
神学校には聖書の根柢が全くない	6
「集會」草創期の兄弟たちは「聖書を教える機関」をいっさい設立しなかった。	8
引き下げられた地域集會の地位	10
専門的牧師職を生み出すことの危険性	11
学問的な資格ではなく聖靈の教え	13
神はその主権により、へりくだった器を用いられる	14
使徒の模範の方がもっと有効である	17
神の標準からはずれることは重大な問題である	18
神の集會以外のものを建てることは、報酬を危険にさらすことである	20
使徒の模範に従え	22

## 聖書学校？

最近、「聖書を教える機関」が私たちの間に増えてきている（それらは地域集会とは全く別個に設けられたものである）。しかし、諸集會に所屬している兄弟たちの多くは、そのことに何の危険も感じていない。彼らは、若くて有望な兄弟たちの啓発や成長に関心があり、そのような機関を、そうした目的を達成するための手段とみなしているのである。

彼らは、諸集會がそのような「啓発的かつ組織的な聖書の学び」を提供していないことにしばしば気づく。その結果、集會とは別に設けられたこのような「学校」が、たとえ理想的なものではなくとも、少なくとも「容認できる選択肢の一つ」であると考えるのである。長老たちも、様々な理由から、集會で必要とされている学びを提供していない。そして、このような教育機関に、自分たちが苦境を脱する安易な道を見いだす。そうして、その件における自分たちの責任を、そうした聖書学校に譲り渡すのである。しかも、驚いたことには、しばしば喜んでそうするのである。墮落というものが常にそうであるように、最初のうち、その変化はゆるやかなものである。しかし、少しずつその欠点が黙認されるようになり、やがてついには、あつて当たり前ものとな

る。ひとたび既存のものとして受け入れられると（特に、神学校が今ほどなかった時代を知らない人々によって受け入れられると）、そのときには一定の傾向ができあがり、そのしたたりが小さな流れとなり、やがてはその小さな流れが一つの川となる。そして、ついにはその川は激流となり、その力の前に何者も抗し得ないようになる。今日の諸集会は「聖書を教える機関」という問題に関してこのような状況に近づきつつある。

その傾向が進むにつれて、抗議の声を張り上げる人々も次第に少数派となり、やがて彼らは「極端な人たち」のグループとして孤立する。彼らは「伝統主義者」の烙印を押され、その時代遅れの理想主義は今日の「現実の」世界では実現不可能だと決めつけられる。そのとき、彼らはかつての預言者たちのように、人々をいらだたせる原因となり、しばしばあざけりの対象となる。そしてついには「荒野で呼ばれる者の声」となる。それは世に入れられない改革者の叫びである。その声に耳を傾ける者など一人もいないのだ！

### 神学校には聖書の根柢が全くない

しかしながら、私たちの抗議は、かつてのイスラエルの預言者たちと同じ動機から発したもので

ある。彼らは、イスラエルの民がみことばと神の道に背いていることに抗議した。私たちは、新約時代の諸集会の型に従ってきたが、集会とは別個に教育機関を設ける必要を感じたことは一度もなかった。このような機関を正当づける聖書の根拠が全くないことは確かである。新約聖書から十分に明らかのように、使徒たちの時代の初代教会における教えや学びはすべて、地域集会の内部にいた忠実かつ賜物のある兄弟たちによって与えられたのである。これらの兄弟たちは、キリストご自身がからだなる教会に与えてくださった賜物であった(エペソ四・8―13)。彼らは聖霊によって立てられた指導者たちだった(使徒二〇・28)。その当時は熱心に伝道する集会が次々に誕生していった。しかし、教えや権威の「中心」となるものは、地域集会以外には何一つなかったのである。組織的かつ制度的な「キリスト教の団体」から離れ去って以来、私たち諸集会にとつての位置づけは、世代を越えて常にこのようなものであった。私たちの「父祖たち」(訳注―「集会」の草創期における指導者たちのこと)は次のように主張した。すなわち、教会時代の初期に、力と新鮮さにおいて新しい動き―教会―が生まれたが、神のみこころは、その頃に神が聖霊によってなされたことが、キリストが再び来られる時まで永続されることであると。使徒の時代以来、新たな啓示は何一つ与えられなかったもので、私たちは今日でもその型に従う義務があったのである。新約聖書の模範は、ただ単純に聖霊に拠り頼むというものであったが、キリスト教界がそこ

から逸脱してしまったために、キリスト教界は混乱し、分裂した状態に陥ったのである。

### 「集会」草創期の兄弟たちは

#### 「聖書を教える機関」をいっさい設立しなかった

私たちの霊的な父祖たちは、人間が作り出した宗教団体（彼らはそれに所属していた）をあとにして、キリストご自身とその御名のもとにのみ集まり、三度と同じ間違いをすまいと決心した。それで彼らは、みことばが示す「型」と「先例」にのみ従ったのである。彼らは、「みことば」と「聖書の型」とに従って集会を持ったのだが、その彼らが、いかなる聖書学校も、そのたぐいの大学やセミナーも決して設立しなかったということはきわめて意義深いことである。彼らの学びはすべて、彼らが聖霊に拠り頼んでみことばを研究した成果であった。彼らは「教えるための材料」をすべてそこから得た。また、彼らには、自分が学んだことを、聖霊に導かれて公の場で教えたり、学んだりできる自由があった。彼らは、自分たちの諸集会の中に「教育機関で訓練を受けた兄弟たちの団体」を公式に認めるといったような考えは、聖霊の主権をはなはだしく侵害するものであり、「聖霊に逆らう罪」であるとさえ主張した。

彼らはすぐれた知的能力と学識を持っていたが、集会の中で認められたものは、学問的な能力ではなく、霊的な賜物のみであった。「集会の草創期」の指導者や教者たちは（他と比較した場合）「霊的な巨人」であったが、神学博士といったような学位や称号を用いた者はその中に一人もいなかった。それどころか、そのような「名誉」を押しつけられたとき、彼らはその受け入れを断固として拒否したのである。彼らは有名になりたいとも思わなかった。教者としての信用をさらに高めるために、自分の名前に学問上の肩書きを付け加える者が多かったが、彼らはそのようなことには見向きもせず、それどころか、自分の著作に自分の姓名の頭文字だけしか書き込まないのが普通だった。彼らが与えようとしていた教訓は次のようなものであった。すなわち、自分たちが提供しているのは聖霊の教えであり、自分たちはそのための単なる「管」にすぎず、したがって自分たちの教えは聖霊の霊的な力と魅力に基づくということだった。

以上、書き記したことは、現在、私たちの間で行われていることと何と大きな違いがあることだろう。一般の「教会」では、どのような肩書きや学位を書き添えることができるかによって、一人の人間の地位や評判があらかじめ決定されているのである。そのような肩書きを与えてくれる教育機関への参加を奨励することは、そのような態度を助長することになる。このようなことはあるべき姿ではない。

## 引き下げられた地域集会の地位

現在、諸集会は、これらの教育機関を大目に見たり、奨励したりする方向に傾いているが、このような流れに私たちが抗議するのには根拠がある。すなわち、それらは非聖書的なものであり、これまで私たちが実践してきたことに真つ向から背くものである。この新機軸は、新約聖書に記された集会本来の単純な姿から私たちを大きく引き離しており、その結果、最後には有害なものとなる。

これらの機関で教えられることから利益が得られるということ、私たちは否定しない。そこで神のことが教えられ、神の真理が詳しく説明される限りは有益なものになるだろうし、実際有益なものに違いない。しかし、そのような場で教えること自体が間違つたことであり、明日の損失の大きさに比較した場合、今日の利益は微々たるものにすぎない。

それが損失である重要な理由の一つは、地域集会の地位や権威、重要性が減少することにある。地域集会は、今日に至るまでずっと、私たちのあかしの中心的な力でありのちである。「真理の柱また上台」(1テモテ三・15)として選ばれてきたものは、「神の家」としての地域集会である。人間が定めた何らかの制度ではない。私たちは次のように信じる。すなわち、新約聖書の中に先

例が記されているわけでもないのに、何らかの制度を新たに設けて、聖書の模範からはずれるとき、私たちは自分たちのあかしを弱め、自分たちの権威を失うだけだと。同時に、キリスト教界の諸教派の間で私たちを特色あるものにしたものを損なってしまうだけだと。私たちの集会は次のような点で「キリスト教界」と異なっていた。すなわち、私たちは、教義と実践の根拠をただ聖書にだけ求めてきた。また、賜物ある兄弟たちを与えてくださるよう統治者なる聖霊に拠り頼み、地域集会の中で彼らが権威をもって学べるよう聖霊の導きに頼ってきた。この聖霊の教えや導きが、「人間の制度」に取って代われようとしている（もともと人間の制度には、伝道や牧会といった神の超自然的なみわざに関して兄弟たちを訓練する力はない）。権威ある教えのための中心が集会から取り去られ、人間の制度に帰属すればするほど、損失と災いが増すばかりである。

### 専門的牧師職を生み出すことの危険性

このように逸脱してしまうと、神のあかしにさらなる悪影響を及ぼし始め、誤りの度は増す。主の働きのための専門的な牧師職を設け、そのための人材を養成することの実際の危険の一つは、このような訓練を受けた者しか専心の働き人として認められず、専心の働き人として推薦される

かどうかはそのような訓練を受けたことが条件になるということである私たちは「聖職者気取り」という悪や、私たちの間に出現してきた「専門家の団体」という悪を助長している。彼らの支配権は、やがて諸集会全体に及ぶだろう。少なくとも、彼らが諸集会の性格を変えることは間違いないだろうし、彼らの影響力が増すにつれて、彼らは深刻な「意見の衝突」や「分裂」の原因になるだろう。それは、使徒たちが召されて間もなくの頃にも起こり、歴史が証言しているとおり、悲惨な結果をもたらした。——私たちは再び同じ方向へ盲目的に進んでいるのである。

これらの機関の「正当性」に異議を唱えるたびに、私たちは「極端な考え方だ」といつて非難されてきた。しかし、このように私たちを批判する者たちが実際には何に抗議していたのかと言えば、私たちが明らかに非聖書的だと分かるものを認めないことに対してだったのである。言い換えれば、私たちが妥協しようとせず、神の原則、聖書の原則を堅く保とうとしたからである。ある人にとっては「極端な考え方」も、別の人にとっては「神に対する忠実」である。したがって、もし、特定の事柄を実践するために、聖書の権威とその中の先例とに強調を置くことが「極端な考え方」であるならば、私たちは喜んで「罪」を認めよう——近代に集會が起こった当時、先駆的な役割を果たした私たちの霊的な父祖たちも同じ尺度で測られた結果、私たち同様に「極端な人たち」だったのである。

## 学問的な資格ではなく聖霊の教え

聖書学校という制度に人々が賛成する一つの理由は、もし私たちがそのような場に若い兄弟たちを送らなければ、私たちの集会が聖書に関して「無学な者」で満たされてしまい、私たちの言うことをだれ一人まじめに受け取らなくなるというものである。もし、集会に所属していると、信頼できる学びやメッセージを得ようとするならば、学問や学識が絶対に必要であると、私たちに向かってまじめに言う人がいた。聖徒にすべての真理を教え、聖徒をすべての真理に導く聖霊の力が何と軽んじられていることだろう（ヨハネ一四・26、一六・13）。聖霊により神の御助けに頼る代わりに、人間に頼って肉の腕にすぎる格好の見本ではないか。私たちの「父祖たち」のために聖霊がなしてくださいださった偉大なことが何と忘れられていることだろう。聖霊は、彼らと同時代の人々の中に賜物ある兄弟たちを起こしてくださいださった。その兄弟たちは、神の群れに仕え、神の群れを養い、永続的なあかしを確立した。それには「神学者」といった資格を何一つ持っていない兄弟たちが用いられたのである。ああ、父祖たちの「外套」を拾い上げて、次のように叫ぶ者はもういないのか。「エリヤの神、主は、どこにおられるのですか」（Ⅱ列王記二・14）。聖

霊を通して働かれる私たちの神は今日制限されているのか神はきのう私たちの霊的な父祖たちのためになされた大いなるみわざを今日もなさることがおできになる。このことを信じられない世代の不信仰の中のみ「制限」が存在するのである（マタイ一三・58）。「わたしを呼べ。そうすれば、わたしは、あなたに答え、あなたの知らない、理解を越えた大いなる事を、あなたに告げよう」（エレミヤ二三・13）。

神学の分野における高い資格を得ることを正当化するために用いられるもう一つの論拠は次のようなものである。すなわち、「学者たち」と同等の資格があるのだという印象を彼らに与えるためには博士号が必要であるというのである。この理屈でいくと、霊的な真理を受け入れるには学問のうえで優秀であることが前提となる。この種の論法には、霊的な要素もなければ、神の御力が働く余地もない。それは人間的なレベルからだけとらえた完全に主観的な見方である。このような理屈は、パウロが述べた原則に真つ向から反対するものであり（Iコリント一・26―29）、肉をたたえることによって神の御力を否定するものである。

神はその主権により、へりくだった器を用いられる

神は「知恵ある者はずかしめるために」（Ⅰコリント一・27）弱くて見下されている器をお用いになるが、この原則は聖書全体を通じてのものである。神殿の中で子どもたちが「ダビデの子にホサナ」と言つて叫んでいるのを見た宗教的な知識人たちや指導者たちはキリストをいさめたが、キリストが「幼子と乳飲み子たちの日に……」（詩篇八・2）という箇所を引用されたために彼らは困惑した（マタイ二一・15、16）。キリストは知恵と力ある者はずかしめるために幼子や乳飲み子をお用いになる。同じ原則がマタイの福音書一章二五節にも見られる。ダビデと彼の投石器のうちにも、ギデオンと彼の三百人の民のうちにも。それは、「人間をとる漁師たち」（ペテロとヨハネ）の力と奉仕のうちにも強調されていた。彼らは、「無学な、普通の人（正規に学んだことがない、すなわち、ラビ専門の教育を受けていない者）」（使徒四・13）であつたためにあざ笑われた。しかし、人々には、「ふたりがイエスとともにいたのだ、ということがわかつて来た」（同）。もちろん、明白な教えは次のとおりである。すなわち、神は、ご自分についてあかしさせるために、知的に最も洗練された階級に属する人々の前に、ご自分の最も卑しいしもべたちを連れて行くことがおできになり、コリント人への手紙第一、一章二六―二九節の原則を支持する力ある行いをなすことがおできになるということである。これら「無学な」漁師たちが書き残した文書の中に含まれている深い霊的真理をもう一度見てみよ。

同様に、神は、王や為政者を始めとした支配階級たちの前でご自分の福音を宣言させるために、見下された四人（パウロ）を用いておられる（使徒二四・24、25、二五・23）。したがって、だれかに福音を届けるためには、その人物と同じ経歴がなければならぬというのには本当ではないし、同様に、高学歴の者と論じるためには、神学校で学んだ者が必要だというのも本当ではない。このような論法は、神の主権を否定し、みことばの原則を否認するものである。

また一方で、様々な神学校や聖書学校の学生たちが学んだテキストや著作物（聖書に関する）の多くは、神学的な資格を何一つ自慢しなかつた兄弟たちによつて書かれたものだった。集会の草創期の兄弟たちは多くの書物を書き記したが、それらのうちの預言に関する書物を詳細に研究したことに對して、ある学位論文に博士号が与えられた。何一つ学位のなかつた兄弟たち（彼ら自身の告白によれば、神の聖靈に信賴することによつて教えられたという）の書物を研究して学位を得ることに確かに矛盾がある！

これらの学問上の「名譽」を授ける権利をこのような機関に与えたのはだれか。それらの權威はどこから来るのか。天からか、それとも人からか。かつての「伝道者（ソロモン）」とともに、私たちは次のように結論せざるを得ない。「すべてがむなしなことよ。風を追うようなものだ」（伝道者一・14）と。

## 使徒の模範の方がもつと有効である

集会とは別に設けられた「神学校」の考え方というものは、私たちが新約聖書の中で得る「教えの模範」と根本的に相いれないものである。たとえば、神学校や聖書学校は、限られた人数の学生たちを地元の集会から「教えの中心」へと追いやるものである。しかし、使徒の模範は、賜物ある教者たちが、次々と諸集会を訪ねて、学ぶことであつた。それも、選ばれた少数の者たちのためではなく、全聖徒たちのために。彼らは様々な集会を訪ねては、教え、みことばを宣べ伝えた。使徒の模範の方がどれほど効果的なことか。そして、どれほど安上がりなことか。彼らは「資金」を浪費することもなかつた。広大な大学の敷地を設けて、それを維持することも、教官を雇うこともなかつたのである。

さらなる訓練を施すために、パウロは「同じ心になつてゐる」(ピリピ二・20) テモテや尊敬すべきエパフロデト、忠実なテトス、役に立つマルコを選ぶ。彼らは「使徒の一行」とともに旅をし、自分たちに必要な霊的訓練期間を過ごした。それは、南インド・ケララ州の偉大なインド人伝道者であり教者であるM・K・V・シモンが採用した方法だつた。彼は、諸集会を訪ねて回るとき、

若い弟子たちの小さな一団を常に伴っていた。このような人物は石やセメントでできた教育施設を設立したりはしなかった。彼らは、模範と実践によって若い兄弟たちを訓練した。しかも、それらの模範と実践はすべて、聖霊が彼らにゆだねられた「集会の霊的な働き」に関連していたのである。

### 神の標準からはずれることは重大な問題である

与えられたものに付け加えたり、与えられたものから取り除いたりすることによって、神の標準からはずれることは実に重大な問題である。いずれの場合も、人間が僭越にも神に干渉して、「神のみわざは完全である」という事実に入り込んでいるのである。「よく注意しなさい」と神はモーセに言われた。「山であなたに示された型に従って、すべてのものを作りなさい」（ヘブル八・5）。このみことばは、物質的な家である幕屋（これは荒野において地上の民に与えられたものであった）に関してモーセに与えられた神の命令であった。もしそうだとしたならば、天の御民に与えられた家のための型に違反することは、どれほど重大なことであろうか。ここで、新約聖書におけるモーセ、すなわちパウロに与えられた「従うべき型」が何であったのかを明らかにすべきであろう。異邦人への使徒としてのパウロに「キリストの奥義」（エペソ三・4）が啓示された。

その奥義とは、キリストが「からだなる教会」のかしらであり、すべての聖徒がそのからだに属しているということである（同三・六）。パウロは啓示によって受けた型に従って、神の集会を植え、建て上げ、確立することに全奉仕を費やした。彼が他人に伝えたのは、この型であった（II テモテ一・13、三・14）。

パウロは熟練した建築家であった。彼が上台を据え、他の者がその上に家を建てるべきであった（I コリント三・10）。その土台とは、イエス・キリストご自身とそのみわざに関する教理であり、したがって、それは唯一の土台であった（同11節）。パウロはその上台の上にとのようにして家を建てるかについては、各自が注意すべきであると厳かに警告している（同10節）。彼は働き人たちが（彼らはパウロに従って、パウロが据えた土台の上に建てている者たちであり、みことばと教理のために労している賜物ある兄弟たちである）が自分の建物を建てるに当たり用いる物は、二種類の材料のうちのどちらかであると教えている。すなわち、永遠に残る物（金、銀、宝石）か、残らない物（木、草、わら）かである。彼は、用いた材料が未来において試されることについても警告している。やがて、火によって試された結果、各人の働きの真価が示されるだろう。その文脈全体は「キリストのさばきの座」について語っているのである。ここで次の質問がなされなければならない。すなわち、パウロが唯一の上台（彼はこの土台を据えるという特権を得た）の

上に建てたものとはいったい何なのか。そして「金、銀、宝石」に相当するものはどちらなのか。パウロは神の集会以外、何も建てなかった。同じ章の一六節は、彼がコリント人たちを「神の神殿（そこには神の聖霊が内住している）」に建て上げたことを示唆している。したがって、それは、「からだなる教会」全体（これは、エペソ人への手紙の二章二〇—二二節で普遍的観点から表現されている）に関することが、地域的な側面において表されたものであった。

神の集会以外のものを建てることは、

報酬を危険にさらすことである

これらのみことばから次のことが明らかであるに違いない。すなわち、神の集会以外に何かを建てることは、「木、草、わら」で建てていることであり、したがって、危険な状態にあるということである。火によって明らかにされる「かの日」には、このようにして「見事に」造り上げたものが焼き尽くされてしまうだろう（Iコリント三・13）。イエス・キリストご自身に関する教理とそのみわざに関する教理に忠実であるならば、その報酬を失わなくて済む。しかし、賢い建築家である師（パウロ）から与えられた型に反して、その上台の上に神の集会以外の何かを建

て上げることは、来たるべき「火による試みの日」に「損害を受ける」(同5節) ことを確かに意味するだろう。

キリストは「わたしの教会」(マタイ一六・18) を建て上げると言われた。キリストはその建物を完成するために、また、従って来る後のすべての世代(彼らを建て上げることも神のみことろであった)への模範とするために、ご自分の使徒たち(特にパウロ)を用いられた。自ら進んで神の奴隷となったパウロは、集会以外には何も建てなかつた。彼は、神であるキリストご自身、キリストが成し遂げられたみわざ、キリストが天においてかしらであること、キリストの永遠の祭司職に基づいて各地に集会を設立した。繰り返すが、彼は、神の御子との交わりに召された者たちを訓練するためのいわゆる神学校や聖書学校を建てなかつたのである。彼はただ地域集会だけを設立した。集会は「御名において集まる所」であり、そこには「キリストもその中におられる」のである(マタイ一八・20参照)。

どのような教育機関も、この約束(すなわち権威)を主張できない。同様に、自分たち自身の教育機関を設立し、その名前に主の御名を付け加え、本来なら主の集会に帰すべき権威と特権をそれらの機関に授けることもできない。そのようなことをすれば、神の集会にのみ与えられた領分であり権限である土台、権威、あかしを侵害することになるだろう。しかし、これこそ、様々

な教育機関や組織がなしたことであり、そのようにして、神のみこころや知恵を無視して、人間の考えや知恵を僭越にも押しつけたのである。このようにして「神がご自身の血をもって買取られた神の教会」(使徒二〇・28)を弱め、その権威を損ねているのである。

## 使徒の模範に従え

親愛なる使徒パウロは、繰り返し繰り返し私たちに熱心に勧めている。「ですから、私はあなたがたに勧めます。どうか私にならう者となってください」(Ⅰコリント四・16、一一・1、ピリピ四・9)。彼は、よみがえられた主を見、その主から啓示を受けた者としての自信に満ちている。そればかりか、聖霊に満たされ、聖霊に導かれた者が持つ心からの確信に満ちている。パウロは、自分の模範が主の道であることを知っている。彼は、教会時代の異邦人世界に集会を「植え始めた者」としての自分の模範が後の世代すべてにとっても正しいものであり、神に喜ばれる道であると知っている。だからこそ、自分に従うようにと諸集会に訴えているのである。異邦人への使徒(パウロ)の教えと模範に従ってさえいたならば、からだなる教会の歴史はどれほど違っていたことだろう。私たちは「分裂」という傷や「高慢」という恥を受けずに済んだことだろう。そ

して、「キリスト教」がローマ・カトリック（その教義と「福音」には重大な過ちがある）の霊的暗黒時代に突入するのを避けることができただろう。

キリスト教界に見られる現在の混乱や、諸集会（聖書的な「集まり方」をしていると彼らは主張している）の間に出現した「かき乱す潮流」を見ると、私たちは難船した船に乗っているパウロのことはを思い出す。「皆さん。あなたがたは私の忠告を聞き入れていたら、こんな危害や損失をこうむらなくて済んだのです」（使徒二七・21）。私たちも、今日、あかしにおける同様の「難船」を避けるべきである。もしそうならば、私たちもパウロの言うことに耳を傾け、神への畏れのうちに、真理のみことばの中にある御声の型に従う必要があるだろう。パウロをとおして聖霊がお語りになったのだから。

## 神学校問題への提言

---

1997年5月30日 初版発行  
2000部

著 者 マイケル・ブラウン

訳 者 下野新平 大佐加須巳

発行者 伝道出版社

発行所 J・B・カリー

〒183-0056 東京都府中市寿町 2-8-9

TEL 042-366-7760

FAX 042-366-7790

印刷所 (株)岩佐印刷所

---